

# 予防接種を受ける幼児に対して 親が行うプリパレーションの実態

## Parent Preparation in Infant Vaccination

保坂 渚<sup>1)</sup>, 安藤 晴美<sup>2)</sup>

HOSAKA Nagisa, ANDO Harumi

### 要 旨

予防接種を受ける2歳から6歳の幼児の親52名を対象に、親から子どもに行う予防接種前の説明の必要性や有無、説明時の子どもの反応、予防接種時の子どもの様子について質問紙調査を実施した。予防接種の説明の必要性については、88.0%が必要である、12.0%が必要でないと回答した。必要である理由は「納得する」「前向きに受けられる」「恐怖心を軽くできる」が多かった。必要でない理由は「恐怖心をあおってしまう」「痛みがあると知り嫌がる」「説明内容を理解できない」が多かった。予防接種の説明の有無については、90.0%が説明し、10.0%が説明していなかった。説明時の子どもの反応と予防接種時の子どもの様子を見てみると、説明時に泣いた子どもは予防接種時に泣くことが多く、説明時に納得していた子どもは泣かずに受ける子どもが多かった。

結果より、子どもを身近で見ている親が子どもの成長発達、性格に合わせた説明をすることが重要であると考えられる。

キーワード 予防接種, 幼児, 親, プリパレーション

Key Words Vaccination, Infant, Parent, Preparation

### 1. はじめに

幼児が検査・処置を受けるうえで感じる不安や恐怖はとて大きなものであり、その不安や恐怖は、子どもにとって大きなストレスとなり得るといことが多くの文献に書かれている。そのため、子どもが心理的混乱を起こさないための援助＝プリパレーションが重要になる。「プリパレーション」とは、日本語で「心理的準備」と訳される。医療を受ける際に、理由よりも何が起こるかを子どもが理解し納得できる方法で説明し、子どもが感じる様々な不安や恐怖心を予防したり緩和することによって、子どもが潜在的にもっている対処能力を引き出す。それにより、子どもが頑張ったと実感できるよう、また、自分の能力に気付くことができるように関わり、健全な心の準備を支援することをいう。予防接種は保健セン

ター、地域のかかりつけ医や開業医で行われることが多いため、医療者との関わりがその場限りとなってしまう。そのため、実施に際して説明をして実施されるまでの時間が短い状況の中で、子どもが痛みを伴う予防接種に向けてあらかじめ心の準備をする時間も少ないのではないかと考えた。先行研究の中では、幼児期、特に幼児前期の子どもに対するプリパレーションへの考え方が消極的であると感じた。また、流郷ら<sup>1)</sup>によると、「母親も、説明してもわからない、説明することで恐がらせてしまう、という考えをもち、子どもへの説明をせずに処置に向かわせる」という事実があった。武田<sup>2)</sup>によると、「子どもにとって過去の痛みの経験は、今後の医療処置を予測、評価し、その痛みや不安に対する対処行動を決定する上で重要な要因である」と述べられている。このように、プリパレーションを受けることで、その体験を今後の医療処置にどのように活かしていけるかも決まってくるのではないだろうか。そのような中で、幼児が心の準備を整え、予防接種に主体的に取り組む為に重要になるのが、普段生活を共にする親のプリパレーションであると考えられる。

そこで、予防接種を行なう際の幼児への説明がその後の予防接種時の幼児の体験にどのように影響されている

受理日：2013年2月13日

1) 山梨大学医学部附属病院看護部：Neonatal Intensive Care Unit, University of Yamanashi Hospital

2) 山梨大学大学院医学工学総合研究部：Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

のか、また幼児がどのように予防接種に取り組むのか、その状況を明らかにし、幼児が今後の医療や診察処置を前向きに取り組めるような関わりについて示唆を得たいと考え、本研究に取り組んだ。

## II. 研究目的

痛みを伴う予防接種を受ける幼児に対して親が行うプリパレーションの実態を明らかにし、幼児期の子どもへの看護のあり方について検討する。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

小児科医院(3施設)において予防接種を受ける幼児(2～6歳)の保護者52名

### 2. 調査期間

平成23年8月から9月

### 3. 調査方法

研究承諾の得られた施設において、予防接種を受けるために来所した幼児の親に研究者が直接、文書と口頭にて研究の主旨の説明と協力の依頼を行った。研究の依頼文書および調査用紙は、予防接種までの待ち時間と予防接種後の待機時間に回答していただけるよう外来受付後、体温測定が終わった後、あるいは、予防接種後に渡した。

調査内容は、子どもとの続柄、親の年齢、予防接種を受ける子どもの年齢、予防接種前の親から子どもへの説明の有無・理由、どのような説明をしたか、何と言って連れてきたか、予防接種中の子どもの様子など全18項目である。予防接種前の親から子どもへの説明の必要性に関して必要である理由あるいは必要でない理由、また、予防接種の説明をいつしたか、説明をした時の子どもの反応などは複数回答とした。予防接種を受けている時の子どもの様子は自由記載とし、回答された意味内容の類似性に基づいて分類し集計した。

調査用紙への回答は自由意思であることから用紙に記入した人は帰宅する時に受付または玄関に設置した回収箱に投函してもらうこととした。

### 4. データ分析方法

親から得た回答の記述統計により、幼児期の子どもへのプリパレーションに関する親の認識(子どもへの予防接種の説明の意義の理解)の実態をみた。さらに、子どもの状況、親の認識による予防接種前の関わりについて検討すると同時に、親の説明が幼児にどのような影響を

及ぼしたかという視点で考察した。統計解析ソフトはSPSS ver. 20を用いた。

## 5. 倫理的配慮

研究を行なうにあたり研究協力施設に対し、研究の主旨、目的、および匿名性や研究への参加は自由意思であり参加を拒否しても不利益を被らないことを文書と口頭で説明、依頼し、承諾書へのサインをしていただいた。研究対象者には、研究への参加は本人の自由意志であり、参加を拒否しても不利益を被らないこと、研究結果については、個人の情報は明らかにならないこと、データは研究目的以外に使用しないことを文書と口頭で説明し、調査用紙への回答と回収をもって本研究への参加の同意とした。

## IV. 結果

### 1. 対象者の背景

調査用紙を依頼したところ52名中51名の回答を得ることができ、うち50の有効回答を得た(有効回答率98.0%)。親の年齢の平均は34.3歳(24～43歳)、子どもの平均年齢は4歳5か月(2歳0か月～6歳3か月)であった。その内訳は、2歳7名、3歳8名、4歳14名、5歳16名、6歳5名であった。回答者の子どもとの続柄の内訳は、母親49名(98.0%)、父親1名(2.0%)であった。

子どもの予防接種の経験回数は、初めて0名、2～5回2名(4.0%)(2歳2か月～5歳9か月)、6～10回17名(34.0%)(2歳4か月～6歳2か月)、10回以上31名(62.0%)(2歳0か月～6歳2か月)であった。

### 2. 説明の必要性の認識と実態

調査の結果、50名中親が子どもに予防接種の説明をすることは「必要である」は44名(88.0%)、「必要でない」は6名(12.0%)であった。「必要である」44名全ての方の「必要である」と答えた理由は複数回答してもらい全回答数は78、多い順に「子どもが納得する」31名(70.5%)、「子どもが前向きに予防接種を受けると考える」18名(40.9%)、「子どもの予防接種への恐怖心を軽くできる」17名(38.6%)、「説明をしないと接種を嫌がる」9名(20.5%)、その他3名(6.8%)であった。その他の意見として「説明をして納得したうえで実施されることで大人への信頼感UPにつながる」、「説明すれば言葉や意味がわかったとき納得できるから」という回答があった。

親から子どもへの説明は「必要ない」6名全ての方の「必要でない」と答えた理由は複数回答してもらい全回答数は7、多い順に「説明をすることで恐怖心をあおってしまう」3名(50.0%)、「説明しても理解できないと思った」2名(33.3%)「痛みがあると知ることで予防接種を嫌

がらと思った」2名(33.3%)であった。「説明の仕方がわからなかった」と答えた人は0名であった。「説明しても理解できないと思った」と答えた親の子どもの年齢は、5歳0か月～6歳3か月であった。

調査で得られた回答のうち、今回の予防接種について「説明をした」は45名(90.0%)で、説明を受けた子どもの最年少は2歳0か月、最年長は6歳3か月であった。また、「説明をしていない」は5名(10.0%)で、説明を受けていない子どもの、最年少は3歳2か月、最年長は5歳8か月であった。

親の説明に関する認識と説明の有無についてみると、説明の必要性を感じている親に、予防接種の説明をした人が多かった。また、子どもに説明をする「必要はない」と答えた人が「説明をした」は4名であり、「必要である」と答えたが、予防接種について「説明していない」は3名であった。親の「説明に対する認識」と「説明の有無」には有意な関連が認められた(表1)。

説明の必要性を感じているが実際に説明を行なわなかった親の回答について、「子どもが予防接種を受けることを嫌がった場合どのように対処したか」という質問に対する自由記載では、「注射をする理由をわかりやすい言葉で説明し論じた」という回答があった。

### 3. 親が説明を行った時の子どもの反応と予防接種時の子どもの様子

親が説明を行った時の子どもの反応については複数回答してもらい全回答数は53、回答者数は45であった。最も多かったものは、「『いいよ』など、納得した様子だった」が19名(42.2%)、次いで「『怖い』『いやだ』など、自

分の気持ちを言葉で表現した」が18名(40.0%)、「黙っていた」が7名(15.6%)、「泣きだした」が4名(8.9%)、「『行きたい』など、肯定的な様子だった」が1名(2.2%)であり、その他と回答した人が4名(8.9%)であった。その他の回答として、「泣かない、頑張ると前向きだった(3歳)」、「A施設なら痛くないからいいよと嫌だけど納得していた(5歳10か月)」という回答が得られた。

予防接種を受ける時の子どもの様子を自由記載で求め類似性に基づいて分類したところ回答数が40となった。多い順に「終始泣く」が7名(17.5%)、「痛がったが終わるとすぐに泣きやむ」が7名(17.5%)、「前向きに受ける」が6名(15.0%)、「静かに受ける」が6名(15.0%)、「逃げようとする 暴れる」が5名(12.5%)、「我慢している」が5名(12.5%)、「医師を見ると泣く」が4名(10.0%)であった。

### 4. 子どもの年齢、説明時の反応と予防接種時の様子について

子どもの年齢別に予防接種時の様子についてみると、2歳では、「終始泣く」、「終わるとすぐに泣きやむ」が2名(33.3%)、3歳では、「終始泣く」が3名(42.9%)、4歳では、「終始泣く」、「逃げようとする 暴れる」、「静かに受ける」、「医師を見ると泣く」が各2名(20.0%)、5歳では、「静かに受ける」が4名(30.8%)、6歳では、「前向きに受ける」が3名(75.0%)であった。年齢が上がるにつれ終始泣いている子どもは減っていた(表2)。

子どもの年齢と親の説明の有無についてみると、3～5歳には説明をしていない親がいた。また、子どもの年齢と親の説明の有無は、「説明をした」は2歳7名(100.0%)、3歳6名(75.0%)、4歳13名(92.9%)、5歳14

表1 母親の説明に対する認識と説明の有無

		説明の有無		計	$\chi^2$ 検定
		説明した	説明していない		
説明の必要性	必要である	41( 82.0)	3( 6.0)	44( 88.0)	p = 0.046
	必要でない	4( 8.0)	2( 4.0)	6( 12.0)	
	計	45( 90.0)	5( 10.0)	50(100.0)	

表2 子どもの年齢と予防接種時の様子

		子どもの年齢と予防接種時の様子						計
		終始泣く	逃げようとする 暴れる	終わると すぐ泣きやむ	前向きに 受ける	我慢 している	静かに 受ける	医師を見ると 泣く
2歳	2(33.3)	0( 0.0)	2(33.3)	0( 0.0)	1(16.7)	0( 0.0)	1(16.7)	6(100.0)
3歳	3(42.9)	1(14.3)	1(14.3)	1(14.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(14.3)	7(100.0)
4歳	2(20.0)	2(20.0)	1(10.0)	0( 0.0)	1(10.0)	2(20.0)	2(20.0)	10(100.0)
5歳	0( 0.0)	1( 7.7)	3(23.1)	2(15.4)	3(23.1)	4(30.8)	0( 0.0)	13(100.0)
6歳	0( 0.0)	1(25.0)	0( 0.0)	3(75.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	4(100.0)

表3 子どもの年齢と親の説明の有無

	説明の有無		n=50 回答数(%)
	説明した	説明していない	計
	2歳	7(100.0)	0( 0.0)
3歳	6( 75.0)	2( 25.0)	8(100.0)
4歳	13( 92.9)	1( 7.1)	14(100.0)
5歳	14( 87.5)	2( 12.5)	16(100.0)
6歳	5(100.0)	0( 0.0)	5(100.0)

表4 子どもの年齢と説明の内容(複数回答)

	説明の内容(複数回答)					n=45 回答数(%)
	予防接種をする理由	予防接種を受ける場所	予防接種の方法	痛みを伴うこと	その他	計
2歳 n=7	3( 42.9)	4( 57.1)	1( 14.3)	2( 28.6)	0( 0.0)	10
3歳 n=6	3( 50.0)	4( 66.7)	1( 16.7)	1( 16.7)	0( 0.0)	9
4歳 n=13	12( 92.3)	8( 61.5)	2( 15.4)	4( 30.8)	0( 0.0)	26
5歳 n=14	9( 64.3)	9( 64.3)	2( 14.3)	4( 28.6)	0( 0.0)	24
6歳 n=5	3( 60.0)	5(100.0)	2( 40.0)	2( 40.0)	0( 0.0)	12

表5 説明時の反応と予防接種時の様子

	説明時の反応(複数回答)									n=40 回答数(%)
	泣きだす	自分の気持ちを表現する	黙っている	話をそらす	聞いていないふり	納得した様子	肯定的な様子	その他	未回答	計
終始泣く n=7	2(28.6)	3(42.9)	3(42.9)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(14.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	9
逃げようとする 暴れる n=5	1(20.0)	4(80.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	2(40.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	7
終わるとすぐに泣きやむ n=7	0( 0.0)	1(14.3)	2(28.6)	0( 0.0)	0( 0.0)	3(42.9)	0( 0.0)	1(14.3)	0( 0.0)	7
前向きに受ける n=6	0( 0.0)	2(33.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	3(50.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(16.7)	6
我慢している n=5	0( 0.0)	1(20.0)	2(40.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(20.0)	0( 0.0)	1(20.0)	0( 0.0)	5
静かに受ける n=6	0( 0.0)	2(33.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	3(50.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1(16.7)	6
医師を見ると泣く n=4	0( 0.0)	2(50.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	2(50.0)	0( 0.0)	1(25.0)	0( 0.0)	5

名(87.5%), 6歳5名(100.0%)であった(表3)。

また、これらの「説明した」人の説明内容についてみると、年齢問わず予防接種をする「理由」「場所」が多く、また、年齢が高い方が説明内容も多いことがわかった(表4)。

子どもの予防接種時の様子と説明時の反応については、予防接種時に「終始泣く」子どもは説明時に「自分の気持ちを表現する」「黙っている」が各3名(42.9%)、接種時に「逃げようとする 暴れる」子どもは説明時に「(嫌だ、怖いなど)自分の気持ちを表現する」が4名(80.0%)、接種時に「終わるとすぐに泣きやむ」子どもは説明時に「納得した様子」が3名(42.9%)、接種時に「前向きに受ける」子どもは説明時に「納得した様子」が3名(50.0%)、接種時に「我慢している」子どもは説明時に「黙っている」が2名(40.0%)、接種時に「静かに受ける」子どもは説明時に「納得した様子」が3名(50.0%)、接種時に「医師を見ると泣く」子どもは説明時に「自分の気持ちを表現する」「納得した様子」が各2名(50.0%)であった(表5)。

## 5. 説明を受けていない子どもについて

今回の調査において、説明を受けていない子どもは50名中5名(10.0%)であった。その子どもは、3歳が2名、4歳が1名、5歳が2名であった。

親の説明の必要性に対する認識をみてみると、子どもに対する説明について、3名が「必要である」と感じており、2名は「必要ない」と感じていた。説明を受けていない子どもの予防接種時の様子については、「前向きに受ける(3歳)」「我慢している(5歳)」「静かに受ける(5歳)」と、泣かずに予防接種に臨む子どもが3名であった。

## V. 考察

### 1. 予防接種を受ける幼児に対して行う説明の必要性の認識

今回の調査において、説明は「必要である」と答えたが「説明をしていない」が3名いた。その親に関しては、「必要である」と考える理由として「説明すれば言葉や意味がわかった時に納得できるから」と答えている。また、予防接種前に説明をしていなくても、いざ予防接種時に子どもが泣くと子どもにわかりやすい言葉で諭していた。このことから、予防接種の場面で子どもが嫌がり泣く姿を目にしてしまうと説明をせずにはいられないが、知らないうちに終わらせてしまいたいという親の心理が働くのではないかと考えられる。その一方で、子どもが納得したうえで恐怖心をあまり感じず、前向きに予防接種を受けることを望んでいる親もいる。

子どもの権利条約でもうたわれているように、子どもには「自由に自己の意見を表現したり、年齢や理解度に見合った説明を受ける権利」<sup>3)</sup>が保障されている。例え

ば、年少幼児に対しては、理解できる言葉で簡潔に話す、絵本を使って具体的なイメージをもてるようにする、子どもがゆっくりと理解していけるような環境で話すなどの方法が考えられる。また、年長幼児は、話の内容を理解できるようになるため、予防接種についての具体的な内容やどのようにすればうまくできるかを伝えることが大切である。吉田ら<sup>4)</sup>は、「子どもの経験につなげた具体的な説明は、共に生活をする母親だからこそできることであり、医療者の説明をわが子がわかる説明に近づけ、“頑張っ乗り越えられる”見通しが持てるようにつなげていける」と述べている。このように、前回の経験を今回の予防接種につなげていくこと、今回の経験を次への経験へつなげるために予防接種後に子どもの頑張りを認める言葉をかけたり、褒めるなどの関わりも必要であると考えられる。

### 2. 親が行う説明と子どもの反応

本調査において、説明時に納得していた子どもは予防接種が「終わるとすぐに泣きやむ」や「前向きに受ける」ことが多かった。反対に、説明時に「泣きだす」「自分の気持ちを言葉で表現する」という反応を見せた子どもは、接種時に「終始泣く」「逃げようとする 暴れる」ことが多かった。このことから、子どもが納得したうえで、予防接種に臨むことが重要である。さらに、子どもが予防接種を前向きに受けるためには、子どもの嫌だ・怖いという感情を受け止めるような関わりが必要なのではないだろうか。

### 3. 説明をしないことによる子どもへの影響

子どもへの説明をしていない親が5名いた。その親は、病院へ行くことのみを伝えて子どもを連れてきていた。その子どもの様子は、「前向きに受ける」「我慢している」「静かに受ける」など、「逃げようとする 暴れる」と比べて肯定的な反応が多いように見受けられるが、その場の感情を押し殺しているとも捉えられる。子どもにとって、予防接種の体験は、非日常的なものである。その中で子どもの恐怖、不安はとても大きいものである。その上、説明を受けずに非日常的な場所に連れてこられ、痛い注射をさせられるということは、子どもの自尊心を傷つけてしまうことにもなりかねない。予防接種の説明を受けていない子どもは、これから行われることを理解できないことに加え、過去の曖昧な記憶などからもこれから起こることに対して不必要な恐怖心を抱いてしまう。また、子どもが医療処置に関する説明を受けないことは、大人に対して不信感を抱くことにもつながりかねない。このように説明の有無は、子どもの将来にも影響する可能性が潜んでいると考えられる。

#### 4. 子どもが予防接種を前向きに取り組むための看護の役割

子どもに対する看護ケアを考える時、親というのはとても大きな存在である。そのため、ケアの焦点は子どもだけでなく、家族にも当てられなければならない。

予防接種という医療者と子どもの関わる時間が少ない現状のなかで、子どもへのプリパレーションへの役割を、生活を共にする親が担わなければならない。プリパレーションの認識が低かったり、医療従事者ほどの知識をもっていない親にとって、その役割を果たすには限界があるため、親に対する医療者の援助が必要であると考えられる。予防接種の予約時に、子どもに対して説明を行なうことの大切さをパンフレットでよびかけるなど、子どもへの説明の必要性を医療者が親に対して働きかけることで多くの親の認識が高まり、それにより結果として子どもが予防接種に主体的に取り組むことができるのではないだろうか。また、本研究において、多くの親が「先生や看護師さんに褒められて(子どもが)うれしそうだった」、「先生や看護師さんが励ましてくれたから、上手に受けることができた」「いつも診てもらっている先生なので嫌がることなく普段通りだった」などの記載があった。子どもが知っている環境で予防接種を受けることは安心感につながると同時に、予防接種に対して前向きに取り組む要因になっていると考える。これらより、親の説明だけに頼るのではなく、医療者も子どもが安心して予防接種を受けられる環境作りが重要である。

## VI. 結論

1. 予防接種の説明の必要性の認識は、「必要である」という親が88%と多かったが、説明が必要であるとされているなかでも、「必要ない」という親が12%いた。
2. 説明の「必要はない」と答えた親でも、子どもが理解できることは説明した親もいた。
3. 親が行う説明と子どもの反応は、説明時に納得していた子どもは、予防接種時も泣かずに受ける子どもが多かった。
4. 説明時に泣くなどの反応を見せた子どもは、予防接種時も「終始泣く」や「逃げようとする 暴れる」ことがみられた。
5. 予防接種の説明をしない親が10%いた。説明内容は「病院へ行く」のみであった。

### 研究の限界と今後の課題

本研究では、同じ地域の3施設に限定された調査であり、対象者数も52名であることに限界がある。今後は、個別接種のみならず集団接種での子どもの様子等も含め

ての検討が必要である。さらに実際を見るという参加観察を含めた考察も必要である。

## 謝辞

本研究にご理解とご協力くださいました保護者の方々、3施設の皆様に深く御礼申し上げます。また、本研究の実施および論文作成にあたり、適切なお助言、ご指導いただきました先生方に心から感謝いたします。

本論文の一部は、第13回山梨大学看護学会学術集会において発表した。

## 引用文献

- 1) 流郷千幸, 宮内環 (2009) 幼児の処置場面における保護者のかかわり. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 1(1): 46-55.
- 2) 武田淳子 (1998) 採血に対する幼児の反応・行動に影響を及ぼす要因. 千葉看護学会誌, 4(2): 12.
- 3) 及川郁子 監修, 村田恵子 編著 (2005) 病と共に生きる子どもの看護. メヂカルフレンド社, 79.
- 4) 吉田美幸, 鈴木敦子 (2009) 検査・処置を受ける幼児後期の子どもが必要としている母親のかかわり. 日本小児看護学会誌, 18(1): 51-58.